ソーシャルワーク専門職の価値志向性測定試案

A Study on The Measurement of Social Work Professionals' Value Orientation

西　川　ハンナ
Hanna NISHIKAWA

要約

本研究はソーシャルワークの価値を、ソーシャルワーカーの専門職志向から測る「ソーシャルワーク専門職の価値志向性尺度」の開発を目的とする。下位尺度はソーシャルワーカーの倫理綱領の 5 つの価値原則「人間の尊厳」「社会正義」「貢献」「誠実」「専門的力量」で構成できるとする研究仮説をたてた。尺度案作成後プレテストを経て、二つの社団法人日本社会福祉士会都道府県支部の全会員を対象に質問票を郵送法にて配布。返送された 623 名の質問票を集計し、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。分析の結果 4 因子 15 項目を抽出。4 因子は「対人援助観」「社会貢献」「社会正義」「専門職としての姿勢」と命名した。α 係数は 0.57 から 0.81 と許容範囲であった。ソーシャルワーク先進国の価値測定尺度には無い「専門職としての姿勢」という因子は、専門性の確立半ばのわが国のソーシャルワーク専門職の価値志向の特徴といえる。

キーワード：ソーシャルワーク専門職、価値志向、社会福祉士、価値原則

目次

Ⅰ. 問題の所在
Ⅱ. 志向性及びソーシャルワークの価値に関する実証研究
　1. 専門職の志向性
　2. 倫理綱領における価値原則と先行研究の構成内容
Ⅲ. 方法
　1. 質問項目の作成過程
　2. 調査対象
　3. 分析方法
Ⅳ. 結果
　1. 基本属性
　2. 尺度の作成
　3. 仮説の検証
Ⅴ. 考察
　1. 多様なベースを持つ社会福祉士
　2. 尺度構成
　3. 今後の課題

Ⅰ. 問題の所在

今日わが国の社会福祉の対象領域が拡大し、多様な基盤を持った専門家がソーシャルワークを展開するようになり、価値の共有化をはかる必要が生じている。それは、今日の実践は多種多様な専門家と共同する際に、その実践の根拠を専門職内外に示すことが必要不可欠となった故である。2005 年に、国際的動向に鑑み「ソーシャルワーカーの倫理綱領」が改訂され、改訂された倫理綱領の中には「ソーシャルワークの価値」が位置づけられ、「価値と原則」が謳われた。また、社会福祉士及び介護福祉士法の一部改訂やその養成カリキュラムの変更がなされ、専門性を先鋭化しようとする今日、ソーシャルワーカーの行動の中に、専門的な価値志向性があることを示す必要である。しかし、ソーシャルワークの専門的思考や価値を測定することは困難（Robinson, et al. 1973）とされ、その存在を測定する方法はほとんど開発されず実証研究は少ない（Pike1994, Abbott2003）。また、ソーシャルワークもそれぞれの国の生活課題や制度政策等によって対象領域や手法が同様ではない。そこで、本研究は、ソーシャルワーカーの専門性を価値志向性の側面から尺度の開発を目的に調査を行い、開発した尺度の構成について既存の海外のソーシャルワークの価値に関する尺度との構成要因の比較を行う。このことは、わが国のソーシャルワーク

専門職の価値志向性を実証的に明らかにすることになり、今後の教育や研修の構成についての一助となると考える。

Ⅱ. 志向性及びソーシャルワークの価値に関する実証研究

1. 専門職の志向性

志向性の測定に関して、様々な分野で研究がなされている。志向性については広辞苑によると「心が一定の目標に向かって動くこと、志が向かうこと。」とあり、職業に関する志向性とは、「どのような仕事が好きか、どんな内容か」といった興味を指すが、そこに含まれる価値観には経済的目的以外にも、自己実現や信念の実現、社会的目的が含まれ、職業興味関心に関する価値測定のツールが開発されている。林（2007）は人々の職業選択に結びつく志向性の実証研究を行い 3 つの主要な特性次元として「公益」「熟練」「裁量」をあげ、これらと「地位志向」により職業の選好に結びつくとした。志向性の研究はさらにパーソナリティーにおける志向性研究も注目されている（Cervone, 2005）。

ソーシャルワークにおける志向性については、アボット（Abbott, 1988）は職能集団の価値志向性に焦点をあて、ソーシャルワーカーの見解（意思決定）には価値志向が含まれるとし、その志向性に注目をした。専門職の価値の測定を試みた先行研究は他に、Howard 他（1982）による Social Humanistic Ideology はソーシャルワーク専攻の学生の人間的な態度の測定のために開発され、調査結果をもとに因子分析を行った結果「社会正義」「個人の自由」「人間性」「人権」をその構成要素とした。その構成概念を肯定する形で、Abbot（1988）の開発した Professional Opinion Scale（以下、POS）を開発し探索的因子分析の結果から 4 つ下位尺度「基本的権利への敬意」「社会的責任」「個人の自由への関わり」「自己決定の支援」に確定した。アボットは、その後改良を加え確証的因子分析を行い 32 項目の質問からなる尺度を完成させた（1998）。Pike（1996）の Social Work Values Inventory（以下、SWVI）は教育と実践との差について測定することを目的とした。（SWVI）は実践の判断には価値が含まれるとして、対象ソーシャルワーカーの教育歴と現任訓練による差を測定しようと試みて、その構成を「自己決定」「秘密性」「社会正義」とした。Csikai ら（1997）の Social Work Idealism Scale（以下、SWIS）はソーシャルワーカーの理想を「個人と社会の変革を評価し促進させる考えと行動」と定義しその一点で専門職価値を構成し、学部性と修士の学生を対象として調査した結果、その職業選択の職種によりソーシャルワークの価値（対象や範囲）に差異があるとした。しかし、SWVI と SWIS の質問項目には、分布の偏りや因子負荷量が十分でないことから下位尺度が現れないなど課題を残した。

一方わが国のソーシャルワークにおける価値測定の研究は、ソーシャルワーカーの理念

型を描くところから出発している南他（2004）によるソーシャルワーク専門職性自己評価指標 Social Work Proficiency Inventory では「使命感」「倫理性」「自律性」「知識、理論」「専門的技能」「専門職団体との関係」「教育」「自己研鑽」の 7 つ領域の一つとして倫理性をあげ、自己評価を持って測定している。他者評価からの測定は宮嶋（2004）によるソーシャルワーカーの行動（行為）を、ソーシャルワーカーでない社会福祉従事者を対象に調査を行ない外的規範として他者評定による専門家の価値を抽出しようとする試みがある。自己評価には客観性が、非専門家による他者評価には信頼性が課題となる。 別の視点から坂野他（2007）は倫理綱領に描かれたソーシャルワーカー像に近い、ソーシャルワーカー像を描く学生はソーシャルワーカーの価値観を持ちえていると仮定し、倫理綱領から価値観に関する 10 項目を作成し主因子法を行って尺度開発の基とする。以上の先行研究からわが国のソーシャルワーク専門職の価値志向を測定するにはわが国の社会保障制度と、わが国のソーシャルワーカーの置かれている現状に合わせた倫理綱領に含まれる価値内容を併せ持つ尺度を開発する必要がある。

2. 倫理綱領における価値原則と先行研究の構成内容

ソーシャルワーク専門職の価値志向を測定するために、その下位尺度となる構成要素を検討する。まず、専門価値とは、ソーシャルケアサービス従事者養成研修研究協議会・倫理委員会では、「ソーシャルワークの使命、価値、倫理、倫理原則、倫理基準の総体を意味しソーシャルワーカーの専門家としての信念、考え方、行動基準を与えるもの」と定義する。すなわち専門価値にはその価値内容だけではなく、信念や考え方（見解）が含まれる。そこで、本研究においては、専門価値に重きをおく考えを価値志向とする。その基となるものが、まず倫理綱領である。そこで、わが国と諸外国等（アメリカ・オーストラリア・イギリス・国際ソーシャルワーカー連盟の「ソーシャルワークの原理」）のソーシャルワーカー団体の倫理綱領に述べられる価値と 3 つの先行研究の価値測定尺度（POS・SWVI・ SWIS）の下位尺度の比較検討を行ったものが、表 1 である。 先行研究とわが国等のソーシャルワーカーの倫理綱領を比較した結果、わが国の倫理綱領は比較した諸外国とほぼ同様の価値原則を示していた。そこで、わが国の倫理綱領における価値原則を、ソーシャルワーク専門職の価値志向性を測定する下位因子の構成要素とした。また、2 つの先行研究と POS において「社会的責任感」としたものは価値原則の「社会正義」に、それ以外の構成要素は価値原則の「人間の価値と尊厳」にその質問項目が適応し「秘密性」は価値原則の「専門性」に内包することとし、5 つの価値原則において尺度の構成要素とした。

表 1 「ソーシャルワークの価値比較」

	value	アメリカ	豪州	イギリス	IFSW	日本	Social Humanistic Ideology	Social Work Values Inventory	The Professional Opinion Scale
service to humanity	人間の奉仕（貢献）	○	○	○		○			
social justice	社会正義	○	○	○	○	○	○	○	
dignity and worty of the person	人間の価値と尊厳	○	○	○	○	○			
importance of human relationships	人間の関係の重要性	○							
integrity	誠実	○	○	○		○			
competence	専門性	○	○	○		○			
individual autonomy and freedom /commitment to individual freedom	個人の自律と自由／個人の自由への関わり						○		○
human nature	人間性						○		
human rights/ respect for basic rights	人権/基本的権利への敬意						○		○
self determination/support of self-determination	自己決定/自己決定の支援							○	○
sense of social responsibility	社会的責任感								○
confidentiality	秘密性							○	

※社団法人日本社会福祉士会倫理委員会「社団法人日本社会福祉士の倫理綱領解説書」p2　2006 を西川が一部加筆

Ⅲ . 方法

ソーシャルワーク専門職の価値志向を測定する尺度を先行研究を統計的手法を用いて開発する。

1. 質問項目の作成過程

ソーシャルワークの専門職志向はわが国の、ソーシャルワーカーの倫理綱領に示される価値原則「人間の尊厳」「社会正義」「貢献」「誠実」「専門的力量」5 つを中心の構成要素とした。その経緯は、まず先行研究から統計的に最も信頼性のある POS（Professional Opinion Scale）改訂版 32 項目を含む原案となった 121 項目を翻訳し、わが国の制度慣習に照らし検討を行い 24 項目に減らし、新たに 5 つの下位尺度の「人間の尊厳」「社会正義」は、Howard 他（1982）の質問項目作成法を参考に社会的弱者とされる高齢者・障がい者・女性・児童・病人・貧困者の抱える社会問題を利用者の自己決定、自由の欲求と権利の尊重、多様性を含む質問項目として作成した [1]。さらに、「社会正義」には、今野他（1998）正当世界尺度、箱井他（1987）の援助規範意識尺度「貢献」は南他（2004）の SWI と酒井他（1997）の価値志向性尺度、「誠実」倫理綱領に対しての誠実、公私の分離、公務員のコンプライアンスを「専門的力量」は使命・誇り・力・技術をキーワードに、全米ソーシャルワーカー協会ソーシャルワーク実務基準及び業務指針におけるコンピテンスと日本

社会福祉士会倫理綱領を参考に質問項目を作成した。新たに「人間の尊厳」（11 項目）「社会正義」（16 項目）「貢献」（14 項目）「誠実」（9 項目）「専門的力量」（31 項目）の 5 つの下位概念として合計 105 項の質問項目を作成した。すべての質問項目の回答は「全くそう思う」（1）から「全くそう思わない」（5）までの 5 件法で求めた。そこで、3 人の実践経験を持つ修士取得社会福祉士と 1 人の社会福祉士取得の大学教員でワーディングを行なった後、105 項目を再度 2 名の大学教授によるワーディングの結果 49 項目へと削減し、プリテストとして、ネットワークのある社会福祉士取得者へと手渡しでアンケート用紙を配布した。結果 68 名の回答があり、項目間の相関を考慮し最終項目 41 項目を決定し、各尺度項目には 1 から 5 点与えて得点化した。

2. 調査対象

ソーシャルワーカーの定義を、社会福祉の国家資格を取得した社会福祉士とした。協力の得られた社団法人日本社会福祉士会都道府県支部 A と B に所属する全社会福祉士合計 1793 名を対象に、性別・教育歴とその専攻・職域・社会福祉実践経験の有無及び経験年数等といった基本属性を尋ねる質問項目を記載したアンケート用紙による専門職の価値志向性調査を郵送法にて行なった。実施期間は 2006 年 12 月から 2007 年 1 月。最終的に 661 名から回答。回収率は 36.9％。そのうち価値志向性の尺度（41 項目）に欠損値がある 35 名を除外した 623 名を対象とした。有効回答率は 34.7％。

倫理的配慮として、社団法人日本社会福祉士会都道府県 A と B 支部に調査依頼の際に、同支部理事会においてを本調査の趣旨、質問項目について吟味検討をして頂き了解を得た。その後、アンケートを支部に送付し配布を依頼。対象者の住所等個人情報の漏洩を防止した。対象者には本調査の趣旨とその方法を書面にて説明。本調査は、無記名での回答であり、調査結果の公表に際し個人が判定されない形をとることを記述した。対象者にはアンケートを配布する際に返信用封筒を同封し回答、回答をしない自由を保障するものとした。

3. 分析方法

尺度については探索的因子分析を行なった。因子間に相関があると考えられることから、主因子法プロマックス回転を行った後、尺度の信頼性は Cronbach の α 係数の算出による内的整合性の検討を行った。統計ソフトは SPSS12.0J を用いた。

Ⅳ. 結 果

回収されたアンケートから尺度項目に欠損値のない 623 名を対象として分析を行なった。

1. 基本属性

基本属性は表2のとおりである。有効回答者の構成は男性223（37.4％）女性390（62.6％）、平均年齢は41.03才、現在福祉職で無い者が27.4％、学歴は大学卒が83.3％。専攻は社会福祉が60.1％。大学院では、38.8％が社会福祉の専攻以外の専門分野を専攻している。社会福祉領域以外の職業経験者は33.5％。

表2　対象者の基本属性

回答者の基本属性			n = 623
		基礎統計	
		人	%
性　別	男	233	37.4
	女	390	62.6
平均年齢	41.03　SD11.84		
職　種	一般企業	171	27.4
	高齢者	114	18.3
	障害者	83	13.3
	医療	85	13.6
	市役所・福祉事務所・社協	71	11.4
	教員	33	5.3
	市役所	29	4.7
	在宅・地域包括	25	4
	児童	19	3
	精神科病院	8	1.3
	NPO	4	0.6
	社会福祉法人	4	0.6
	無回答	6	1.1
所有資格	介護支援専門員	314	50.4
	精神保健福祉士	67	10.8
	介護福祉士	128	20.5
	看護師	20	3.2
	保育士	49	7.9
教 育 歴	専門学校	33	5.3
	短大卒	23	3.7
	大学卒業	519	83.3
	大学院卒業	47	7.5
	無回答	1	0.2

2. 尺度の作成

本研究で設定した尺度は5つの価値原則を基に構成されたソーシャルワーカーの見解を尋ねる項目で構成をおこなった。41項目について因子分析をおこなう際、まず、5原則での構成要素は5つの下位因子に成って現れるのではないかという仮説に基づき、固有値1以上の主成分は5つ（5つの価値原則）とし、仮定尺度の41項目（11.14.37は、反転項目）の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果およびフロア効果のみられた項目を以降の分析から除外し、残りの項目に対して主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った。しかし、5因子における分析ではα係数が0.81～0.42と低く、5因子における分析は難しいと判断した。そこで再度固有値1として、因子分析（主因子法

のプロマックス回転）を行い固有値の大きさ、因子の解釈のしやすさを考慮して探索的に因子分析を試みた結果最終的に 4 因子 15 項目を抽出した。（表 3）4 因子の累積寄与率（説明率）は 53.3％であった。それぞれの因子は以下のように解釈された。第一因子（5 項目）は「人の喜びや悲しみを共に分かち合いたいと思う」「人の役に立ったり、人を助けたりすることに充足感を見出す」「人を助ける仕事にやりがいを感じる」といった人に対する援助観を表す項目群となったことから「対人援助観」と命名した。第二因子は（3 項目）「社会全体にも役立つ仕事をするべきだ」「仕事を通して社会に大きな貢献をすべきだ」といった仕事における社会貢献意識を表していることから「社会貢献」と命名した。第三因子（5 項目）は「政府は貧困者に対して支出しすぎている」「野宿をしている人は本人自身に問題がある（反転項目）」といった制度政策に対する平等や正義を表す項目群であることから「社会正義」と命名した。第四因子（2 項目）は「自費でも仕事の技術を学ぶ研修に参加するべきだ」「仕事には誇りを持って臨むべきだ」という仕事に対する専門職の姿勢を示すことから「専門職としての姿勢」と命名した。以上の因子の信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、第一因子「対人援助観」の α 係数は 0.81 第二因子「社会貢献」の α 係数は 0.81 第三因子の α 係数「社会正義」は 0.65 第四因子「専門職としての姿勢」の α 係数 0.57 であった。

表 3　ソーシャルワーク専門職の価値志向性尺度の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
s4 人の喜びや悲しみを共に分かち合いたいと思う	.727	-.025	.065	-.033
s2 人の役に立ったり、人を助けたりすることに充足感を見出す	.699	.033	-.022	-.077
s3 人の生き様を深く知って、心から共感を覚えることがある	.695	-.117	.010	-.020
s10 人を助ける仕事にやりがいを感じる	.685	.082	-.072	.096
s6 困っている人を見る放っておけない気持ちになる	.540	.060	.068	.079
s30 職業に就くなら社会全体にも役立つ仕事をするべきだ	.000	.843	-.036	-.043
s8 働くならば社会に欠く事のできない仕事をするべきだと思う	.000	.808	-.028	-.008
s16 仕事を通しての社会に大きな貢献をするべきだ	-.022	.649	.026	.081
rs11 政府は貧困者に対して支出しすぎている	-.038	-.093	.611	.074
s5 すべての人に一定所得は保障されるべきだ	-.005	.149	.606	.001
s26 貧富の格差は、所得の再配分を行なうことにより縮小するべきだ	.006	.145	.553	-.070
s37 野宿している人は本人自身に問題がある	-.012	.170	-.545	-.008
s28 罪を犯した人の社会復帰を支援する上で主要な責任は、国が負うべきだ	.090	-.005	.304	-.039
s36 自費でも仕事の技術を学ぶ研修に参加するべきだ	-.009	-.021	.024	.653
s35 仕事には誇りを持って臨むべきだ	.001	.046	-.030	.616
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
		.492	.430	.480
			.299	.444
				.255

3. 仮説の検証

5つの価値原則を基に作成した仮説（以下、尺度構成案）の質問項目が、因子分析の結果どのような構成にまとまっていったのか比較検討する。第一因子の「対人援助観」には質問項目作成段階で「社会正義」「社会貢献」「専門的力量」「誠実」のそれぞれの項目とする質問項目の対人援助というソーシャルワークのミクロに関する部分が集まった。第二因子「社会貢献」第三因子「社会正義」第4因子「専門職の姿勢」は尺度構成案のままの領域に残った。尺度構成案の「人間の尊厳」に値する項目「高齢者には、精神的支援をするサービスはあまり必要無い」などは、回答に大きな偏りがあり統計処理の際に削除項目となり、結果的に残らなかった。

Ⅴ. 考察

本研究はソーシャルワーク専門職の持つ価値は価値志向性として態度となって現れるという点に着目し、社会福祉専門職団体協議会倫理綱領委員会が改訂を行なったソーシャルワーカーの倫理綱領に示される価値原則を価値の下位尺度として質問項目の作成にあたった。以下尺度開発の経緯と結果を踏まえ考察し今後の課題を明らかにする。

1. 多様なベースを持つ社会福祉士

ソーシャルワーカーを国家資格所得者である社会福祉士として調査を行なったが、その基本属性にも社会福祉士の多様性が現れた。職能団体に加盟している社会福祉士の約3割が社会福祉と関係のない一般企業に所属している。また、介護支援専門員の資格は50.4％と半数以上、2割の社会福祉士が介護福祉士を所有している。大学院卒の約4割が他分野にて専門教育を受けている。これらの結果から考察すると社会福祉士も多種多様なベースを基に、到達地点なのか、通過点なのか、土台としての資格なのか所得者の所有観も異なるはずである。今後ますます社会福祉士取得後の研修において専門職としての専門価値の確認、アイデンティティーの形成の機会が必要となる。

2. ソーシャルワーク専門職の価値志向を測定する尺度構成

尺度案の構成には、ソーシャルワーク専門職が価値あるものとする、ソーシャルワーカーの倫理綱領における価値原則を下位因子とするという仮説をたてた。結果はこの仮説は統計的に成立しなかった。しかし、探索的因子分析の結果、4つの因子を発見し、第一因子を「対人援助観」、第二因子は「社会貢献」第三因子「社会正義」第四因子は「専門職としての姿勢」とした。第一因子「対人援助観」では、人権の尊重を前提にした個人の支援に向き合う態度というソーシャルワークのミクロの実践に求められる要素が、第二因子「社

会貢献」は職業における利他性、第三因子「社会正義」ではソーシャルワーカーの個人の幸福を制度政策から見つめるマクロの視点を示す要素が抽出された。ソーシャルワーク専門職の価値の実証研究における先行研究の 3 つの価値測定尺度（POS・ SWVI・ SWIS）の下位尺度と本研究における尺度の下位因子の項目を比べると「専門性」に関する項目の有無が大きな差となってくる。これは、諸外国のソーシャルワーカーと比べわが国のソーシャルワーク専門職者は、社会における資格の認知度が低く、また業務独占領域も少ない。専門職としての教育歴や資格も問われない境界線が曖昧な分野もあり、「専門性」がさほど評価されない現状もある。そこで、ソーシャルワーク専門職の価値志向性の構成内容には「専門職の姿勢」が重要不可欠だと考える。「専門職としての確立」「専門性の構築」それ自体が課題として、わが国のソーシャルワーク専門職の価値志向性に反映されたと考えられる。また、先行研究であげられた基本的人権に含まれるとした、「市民権」「基本的人権への敬意」といった項目はわが国のソーシャルワーカーには価値前提として捉えられている回答の偏りから統計的に考察することができる。逆に先行研究における尺度を用いたアメリカにおいては、性・年齢・障がいにおける差別の禁止等が法律で謳われ、それらはソーシャルワーク実践の領域でもある。そこで、人権についてもの大きな価値志向の一部となり、この部分に差異が生じたと考える。先行研究における下位因子項目の「人間の尊厳」とされる質問項目 4 つが因子分析の過程で削除されが、人間の尊厳に当たる質問項目は、援助を行なう際のもっと抽象度の高い項目が残ったと考えられる。

3. 今後の課題

本研究では、開発した尺度は信頼性分析を行うことで一つの信頼性の測定を行った。構成概念妥当性の測定はいくつか方法があるが、一つは、本尺度は「ソーシャルワーク専門職」を対象に専門職志向を図る試みを行った故、尺度が統計的に調整された後他分野の集団もしくは非ソーシャルワーク専門職群との間に集団差が存在することを確認する必要がある。また今後、Pike（1996）の仮説のような教育歴や実践領域による価値志向に有意な差があるのか、性別、学歴、年代、実践領域といったものを独立変数に有意差の有無や相関関係などの分析を進める。更に、探索的因子分析のみならず、ここで明らかにした 4 因子間の関係性など確証的因子分析を使って更に検証していくことを次の課題とする。

本研究を進めるにあたり、その趣旨をご理解いただきご協力くださった 2 つの社団法人日本社会福祉士会都道府県支部及びその会員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

本研究成果は財団法人損保ジャパン記念財団平成 17 年度福祉諸科学研究助成を受けて実施した「ソーシャルワーカーの専門職倫理と価値についての研究」の研究成果の一部である。

注 1　ソーシャルワーク専門職の志向性尺度の開発過程の詳細については 2008 年日本社会福祉学会第 25 回全国大会にて「ソーシャルワーク専門職の価値志向性尺度の開発にむけて」と題して報告を行った。

参考文献

Abbott. Ann A（1999）Measuring social work values: A cross-cultural challenge for global practice International Social Work. 42: 455-470

Abbott. Ann A（2003）Confirmatory Factor Analysis of the Professional Opinion Scale: A Values Assessment Instrument Research on Social Work Practice, Vol.13, No.5, 641-666

Cambridge Advanced Learner's Dictionary　http://dictionary.cambridge.org/ 2008.10.15

Pike.Cathy.King（1996）Development of the social work values inventory Research on Social Work Practice, Vol. 6, No.3, 337-352

Cheris Beckett, Andrew Maynard Values&Ethics in Social Work（2005）Sage Publication

David Watson and J. WEST “Social Work Process and Practice : Approaches, Knowledge and Skill” ;（2006）Palgrave Macmillan Paperback29

E Csikai, C Rozensky（1997）Social work idealism and students' perceived reasons for entering social work Journal of Social Work Education, 33, 529-538.

Elizabeth J. Greeno（2007）A Confirmatory Factor Analysis of the Professional Opinion Scale Research on Social Work Practice, Vol.17, No.4, 482-493

フレデリック・G. リーマー著（2001）秋山智久訳「ソーシャルワークの価値と倫理」中央法規出版

Frederic G. Reamer（1998）; Social Work, Vol.43, 1The Evolution of Social Work Ethics

Frederic G. Reamer（1998）; The Evolution of Social Work Ethics Social Work, Vol.43, 488-500

箱井英俊・高木修（1987）「援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較」社会心理学研究　3.39-47.

Howard TU, Flaitz J.A（1982）scale to measure the humanistic attitudes of social work students. Social Work Res Abstr. Winter;18（4）:11-8

今野裕之・堀洋道　（1998）「正当世界信念が社会状況の不公正判断に及ぼす影響について」筑波大学心理学研究　20.157-162.

川村隆彦（2001）「価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習」中央法規出版　12p

国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）のソーシャルワークの定義　http://www.ifsw.org/en/p38001190.html　2008.10.16

黒木保博（2004）「ソーシャルワーク実践の価値と倫理―倫理ディレンマのための検討に向けて―」秋山智久・井岡勉・岡本民夫・黒木保博・同志社大学社会福祉学会編　320-329　『社会福祉の思想･理論と今日的課題』筒井書房

Loewnberg, F. M（1984）Professional Ideology, middle range theories, and knowledge building for social work practice. British Journal of Social work, 14, 309-322.

西川ハンナ（2007）専門職と専門性 ソーシャルワーク実践における価値とその意義（［日本社会事業大学社会福祉学会］第 45 回社会福祉研究大会報告）－社会事業研究（通号 46）98-103

Mel Gray and J. Fook（2004）The Qest For a Universal Social Work : Some Issues And Implications Social Work Education Vol.23, No.5. October. 625-644

宮嶋淳（2004）「ソーシャルワーカーの倫理―原則と基準―を特定するための試行～『ソーシャルワーカーの職業倫理に関する調査』を中心に～」日本社会福祉学会関東部

会論文集第 4 号（通巻 6 号）18-31
村上みち子・舟島なをみ・野本百合子（2006）「看護学教員の倫理的行動に関する研究―倫理的行動指針の探求―」看護教育学研究 Vol.15　No.1　34-47
岡田藤太（1988）「ソーシャルワークにおける価値の問題」『ソーシャルワーク研究』相川書房 Vol.14　No.2　76-81
Omery, A（1989）Values, moral reasoning, and ethics. Nurs Clin North America 24（2）499-508
Robimson, J. p., & Shaver, P. R.（1973）. Measures of Social Psychological Attitudes. Ann Nabor, Michigan : Institute for Social Research.
嶋田啓一郎（1980）「社会福祉の思想と理論」ミネルヴァ書房
武田加代子・南彩子・杉本照子（1996）「ソーシャルワーク実践における価値～意思・看護師・ソーシャルワーカーの比較調査から～」『社会福祉学』37（2）101-115
酒井恵子・久野雅樹（1997）「価値志向的精神作用尺度の作成」『教育心理学研究』45.388-395
坂野悦子・坂井圭介・河野理恵・渡邉浩文・鳩間亜紀子・加藤尚子（2007）「社会福祉実習における価値観の習得に関する研究―社会福祉援助技術に基づく「価値観」項目の検討―」目白大学総合科学研究　3 号 73-82
ソーシャルケアサービス従事者養成研修研究協議会・倫理部会（2002）『「ソーシャルワークの価値と倫理並びにその教育のあり方」に関する報告書』13
ソーシャルケアサービス従事者養成・研修研究協議会（2002）「社会福祉系大学、専門学校、高等学校福祉科等におけるソーシャルワーク教育法および教材の開発に関する研究」報告書
社団法人日本社会福祉士会倫理委員会編（2006）「社団法人日本社会福祉士会の倫理綱領解説書」社団法人日本社会福祉士会
Watson, D and West. J（2006）Social Work Process and Practice : Approaches, Knowledge and Skills Palgrave 29
全米ソーシャルワーカー協会の倫理　http://www.socialworkers.org/pubs/code/default.asp 06.09.20